

助けたいで終わらせない

安来市立伯太中学校 二年 泉住幸花

あなたは、困っている誰かのために、すぐに行動できていますか？

私は小学六年生のときの経験から、その大切さを学びました。スポ小のバレーボール大会の決勝戦。私はサーブレシーブを拾おうと前に出た瞬間、右足に激しい痛みが走り、そのまま崩れ落ちてしまいました。病院での診断は「下前腸骨剥離骨折」。足の付け根の骨折で、全治六週間でした。そのときの痛みも辛かったですが、それ以上に「しばらくバレーができない」という悔しさが心に残っています。そして松葉杖で生活するのが不安でいっぱいでした。

学校の教室は三階にあり、階段を上だけでも私にとっては大変なことでした。そんな中、毎朝昇降口まで迎えに来てくれる友達がいました。重たいランドセルを代わりに持ってくれ、一步一步、私のペースに合わせて階段を上ってくれました。それだけでなく、少しでも私が困っている様子を見つけると、すぐに手を差し伸べてくれる友達が何人もいて心を救われました。

やさしさを感じたのは、友達からだけではありませんでした。松葉杖で買い物に行ったときの事です。お店のドアの前で戸惑っていた私に、見知らぬ女性の方が気づいて、ドアを開けてくださいました。たった一瞬のことでしたが、そのときの私には本当にありがたくて、今も忘れられません。

片方の足が不自由になるだけで、思っていた以上にできないことが増え、生活がしにくくなることを実感しました。松葉杖や車椅子を使っている方が、どれほど大変な思いをされているのか、経験を通して初めて知ることができました。そして同時に人のやさしさがどれほど心を支えてくれるのかも学びました。それ以来、困っている人に手を差し伸べられる人になりたいと強く思うようになりました。

あの経験から一年以上が経ち、中学二年生になった今、もう一度、自分の思いを試される出来事がありました。

先日、双子の妹と買い物に出かけたときの事です。松葉杖をつきながら、傘もさせずに雨の中を歩いているおばあさんがおられました。見た瞬間、とっさに「助けたい」と思いました。でも知らない人だし、声をかけても迷惑がられるかもしれないと心の中で言い訳をしまい、何もすることができませんでした。

そんな横で、妹がすぐにおばあさんに駆け寄り、傘に入れてあげて、一緒にお店まで歩いていきました。その方が、「忙しいのにありがとうね。」と笑顔でお礼を言われているのを見て、心が温かくなりました。そして、すぐに行動できる妹は、本当にすごいなと思いました。

足が不自由な経験をして、大変さを分かっているつもりだったのに、私は動けませんでした。そのとき初めて気がついたのです。人を助けるということは、思っていたよりもずっと難しいということに。

誰かを助けるためには、「勇気」が必要なのです。やさしさは、心の中にあるだけでは、誰も救うことができません。困っている人に気づき、「一歩踏み出して行動する」。それこそが、本当のやさしさだと思います。

助けることは、誰かにかっこよく見せたり、目立ったりするためのものではありません。声をかけて、たとえ迷惑がられても、目の前の誰かの力になろうとすることは、決して恥ずかしいことではないと思います。

これからは、自分の気持ちに正直に、勇気を持って行動できる人になりたいです。あのとき、私を助けてくれた人たちや、迷わず動けた妹のように、誰かの力になれる人を目指していきます。「助けたい」で終わらないやさしさを、これからも大切にしていきます。